

蒲生秀行と 宇都宮城

蒲生秀行は、平将門の乱を鎮圧した藤原秀郷の子孫で、信長・秀吉に仕えて会津92万石を領した戦国武将氏郷の息子です。天下分け目の関ヶ原合戦前後の約4年間にわたって宇都宮城主をつとめ、近世城下町宇都宮の原型を形づくりました。そこで今回の特集では、秀行と近世初頭の宇都宮城に注目します。

history

1 宇都宮一八万石を 領した蒲生秀行

栃木県立博物館 江田 郁夫

秀行の 宇都宮城主就任

奥州会津（福島県会津若松市）で九二万石を領していた蒲生秀行（初名秀隆、一五八三～一六三二）は、豊臣秀吉の命によって慶長三年（一五九八）二月に宇都宮に移り、それまで長年にわたって宇都宮氏が支配していた所領一八万石を引き継ぎました。それまでの会津時代と比べて、

領地高が五分の一以下に減らされるという大幅な減封とはなりましたが、なんとか取り潰しを免れることができました。

当時、秀吉の周囲では、弱冠六歳の当主秀行に会津九二万石を任せるのを危ぶんで、秀行のかわりに越後から上杉景勝を国替えさせるべきとの意見があっただけでなく、実際に減封前年の慶長二年には蒲生氏重臣とうしの抗争が起こるなど、蒲生氏は存続の危機に直面していました。幸い秀行は、秀吉の意向によって慶長元年

十二月に徳川家康の娘振子^{ひでこ}を妻に迎えており、今回は岳父家康の強力なうしろだてもあって蒲生氏の存続が認められました。

以前の五分の一以下の領地高になったとはいえ、宇都宮は北関東随一の要衝であり、かつ一八万石の石高はたとえば相模国八郡（現在の神奈川県の一部）一九万四千余石と遜色がないくらいの大封（広大な領地）でした。宇都宮城にはいった秀行は、領内の重要拠点である笠間城（茨城県笠間市）には石高二万石で蒲生郷成、真岡城（真岡市）には八千石で町野繁仍、川崎城（矢板市）には六千石で蒲生郷可らを配置して所領支配を固めました。また、宇都宮まで随行した家臣たちに領内でのあらたな知行地を与えるなど、さっそく秀行は蒲生家中の再編成に取り組んでいます。

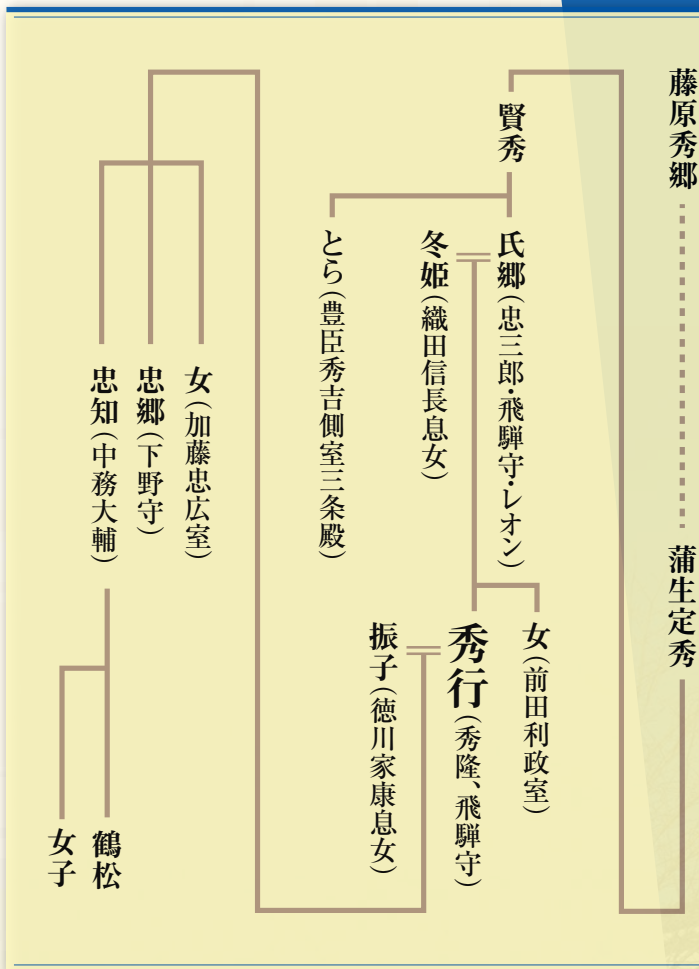
名門蒲生氏と 会津太守氏郷

そもそも蒲生氏は、平安時代に起こった平将門の乱を鎮圧した藤原秀郷の子孫と伝えられます（「蒲生系図」）。秀郷の子で東北支配にあたる鎮守府將軍をつとめた千晴^{ちはる}の末裔が近江国蒲生郡（滋賀県日野町ほか）を領し、蒲生氏を名乗ったとされています。

戦国時代末期に活躍した秀行の父氏郷（一五五六～九五）は、織田信長に仕えて信長の娘冬姫を妻とし、本能寺の変で信長が倒れたあとは豊臣秀吉に仕えて妹とらを秀吉の側室（三条殿）とするなど、ときの天下人からあつい信頼をうけ、かれらと緊密な関係を保ちながら栄進をとげました。氏郷は、祖父定秀、父賢秀以来の居城日野城を皮切りに、天正十二年（一五八四）には伊勢松ヶ島城（三重県松阪市）三万石に、そして天正十六年には同国松阪城へと移り、いよいよ天正十八年の小田原北条氏攻めを迎えます。

秀吉の小田原攻めには総勢二〇万を超える大軍が関東へと下向し、七月上旬に北条氏を滅ぼした秀吉はその後、同月二十六日に宇都宮、つづいて八月九日には会津にはいつて天下統一の総仕上げに着手します（関東・奥羽仕置）。そのさい、氏郷にはあらたに会津四二万石が与えられ、翌年には奥州で起こった大崎・葛西一揆鎮圧の功績によって七三万石に増えられ、さらに文禄三年（一五九四）の太閤検地を経て最終的な氏郷の知行高は九二万石となりました。

蒲生氏略系図



文武に すぐれた父氏郷

会津九二万石の太守となった氏郷は城下町整備に乗り出し、旧領である近江日野から移った商人らが集住する日野町（のち甲賀町、現相生町）を新設しています。また、あわせて日野の式内社馬見丘綿向神社参道の若松の森にちなんで、地名も旧来の会津黒川から若松に改めたといわれています。すでに氏郷は、会津以前の伊勢松阪城下でも日野商人を招いて日野町を設けており、蒲生氏と日野の結びつきの強さがうかがえます。

勇猛な武将として知られる氏郷ですが、じつは佗び茶を大成した千利休の高弟でもありました。氏郷は、茶人として有名な古田織部（重然）や細川忠興（三斎）らとならんで、利休のすぐれた弟子「利休七哲」に数えられ、利休が秀吉の勘気をこうむって切腹したあとは千家の再興にも尽力しています。現在、会津若松城内に残る茶室麟閣は、氏郷の庇護下にあった利休の娘智少庵が建立したとされています。

また、歌人でもあった氏郷には、秀吉の朝鮮出兵にともなって会津から九州名護屋城（佐賀県唐津市）に向かったおりの「蒲生氏郷紀行」（『群書類従』一八）があり、氏郷が白河の関（福島県白河市）を越えて下野にはいり、芦野（那須町）、那須野が原、佐野天明（佐野市）の各地を経由したのち、上野・信濃・美濃・近江へと至

ったことがわかります。

そのさい氏郷は、芦野では歌人西行や謡曲「遊行柳」ゆかりの柳を眺めて、「今もまた流れは同じ柳かげ、行き迷いなば道しるべせよ」と詠んでいます。那須野が原で「世の中に我は何をか那須の原、なすわざもなく年やへぬべき」と詠んだ氏郷は、古来からの歌枕のひとつ「佐野の舟橋」に到着し、「これやこの佐野の舟橋渡るにぞ、いにしえ人のことあわれなる」と詠みました。もともとの「佐野の舟橋」は、上野を流れる烏川の舟橋（群馬県高崎市）が舞台でしたが、すでに戦国時代以降は佐野を流れる佐野川（現秋山川）にかけられた舟橋との認識が一般化していました（「東路のつと」）。

以上の経路からは、会津を発した氏郷が猪苗代湖南岸をとって白河の関を訪れ、下野では北から芦野、大田原（大田原市）、宇都宮と南下して、その後は壬生（壬生町）、栃木（栃木市）を経由して佐野天明に至り、足利（足利市）をとって上野にはいったものと考えられます。宇都宮以北の経路はかつて天正十八年に秀吉が宇都宮での仕置後に会津に向かった行程と重なり、また宇都宮以南は慶長六年に京都伏見から出羽米沢（山形県米沢市）へと下向した武士前田慶次の行程とほぼ重なります（「前田慶次道中日記」）。

関ヶ原合戦と秀行

秀行が宇都宮に移ってからまだまもない慶長三年八月十八日に秀吉が六二歳で没



蒲生秀行領知宛行状(南小平次あて) 栃木県立博物館蔵



蒲生秀行廟（会津若松市）

しました。遺児の秀頼はいまだ六歳に過ぎず、秀吉死後の政権運営は徳川家康・前田利家・上杉景勝らの五大老と石田三成らの五奉行に託されました。ところが、翌慶長四年閏三月三日に今度は利家が病没し、利家の死去とともに武功派諸將の石田三成に対する不満が一気に噴出した結果、三成は政権を離れて居城の佐和山城（滋賀県彦根市）に隠退しました。その後、徳川家康が秀頼のいる大坂城に移つて豊臣政権を主導し、翌慶長五年になると会津在国中の上杉景勝との関係が極度に悪化したため、家康は上杉氏攻めを諸將に命

じ、同年六月十六日にはみずからも東国に下りました。上杉氏攻めにさいしては宇都宮城が本営となる予定で、七月中旬ごろには諸將が続々と宇都宮周辺に集まりつつあったほか、家康本人も同月二十一日に江戸を發しました。ところが、同じころ家康不在の大坂城では、三成が佐和山城から移つて大老毛利輝元・宇喜多秀家らを中心に反家康派を糾合し、家康との敵対を公然としました。宇都宮への下向途中にこの報告をうけた家康は、急遽小山（小山市）で諸將と対応策を協議し、上杉氏攻めを中断して西上のうえ三成らと戦うことに決しました（いわゆる小山評定）。

この方針にもとづき、さうそく諸將は西上をはじめ、家康も宇都宮に在陣後、八月五日に江戸に戻り、九月一日には江戸を發して大坂へと向かいました。いっぽう、家康の子秀忠は宇都宮城で今後の上杉氏対策を講じたあと、八月二十四日に宇都宮を出陣して信州真田（長野県上田市）に向け進軍していきました。宇都宮城で留守を守ったのは秀忠の兄で秀吉の養子となり、結城氏の家督を継いでいた結城秀康で、これを小笠原秀政・鳥居忠政・内藤政長・大須賀忠政らの家康家臣が補佐しました。宇都宮城主であり、家康の娘婿であった秀行も、当然のことながら秀康から頼りにされていたと思われま

す。結局、西上した徳川家康率いる軍勢とこれを迎え撃つ石田三成らの軍勢は、九月十五日に美濃関ヶ原（岐阜県関が原町）で激突し、激戦のすえに家康軍が勝利し

ました（関ヶ原合戦）。信州真田を経て家康軍に合流する予定だった秀忠軍は、敵対する真田昌幸の征討に時間を要したばかりでなく、予想以上の急展開で関ヶ原合戦がおこなわれ、かつその帰趨もたった二日で決したため、合戦に間に合うことができませんでした。

その点に関連して特筆されるのは、関ヶ原合戦には参戦せず、宇都宮城にあつて家康・秀忠軍の背後を上杉軍から守った結城秀康が、関ヶ原合戦後に旧知行高の約一〇万石から、あらたに越前北ノ庄（福井県福井市）六七万石に大幅加増されていることで、家康がその功績を高く評価していたことがうかがえます。同様に秀行も、四二万石の加増をうけて会津城主に復することができました。秀行の会津復帰は慶長六年九月とされています。結局、秀行が宇都宮領一八万石を治めたのは、慶長三年二月から慶長六年九月までの三年七か月間だったことになります。

会津に戻った秀行は、慶長十七年五月十三日に三〇歳で病死しました。一六歳のときに大幅な減封によつて宇都宮城主となり、つづいて二九歳で大幅な加増をうけてふたたび会津城主に復帰するという波乱の生涯でした。秀行の死去を記した『当代記』には、「常到大酒。諸事に行儀なく、放埒」とあつて、その評判はけつて芳しいものではありませんが、一〇代の若さで体験したまるでジェットコースターのような没落と復活は、その後の秀行の人生にも少なからぬ影響を及ぼしたことと思われま

宇都宮にとつての 蒲生時代

四〇〇年以上の長きにわたつて宇都宮を治めた宇都宮氏が、慶長二年十月に秀吉によつて滅ぼされたあと、秀行が宇都宮城に在城したのはわずか三年七か月間にとどまります。期間にすれば宇都宮氏の百分の一にも及びませんが、その時期が宇都宮にとつて大きな変革期だったことはまちがいありません。

宇都宮氏やその一族・家臣の退転にともなつて、宇都宮城やその城下屋敷が空き家となり、またかれらと密接不可分の関係にあつた宇都宮明神（現二荒山神社）や菩提寺東勝寺などの社寺も存続の危機に直面しました。宇都宮明神は社領を大幅に削減されたものの、秀行の入部後もその宗教的な地位を保つことができたが、城下に広大な敷地を有していた東勝寺は廃寺となり、その跡地の一部には秀行ゆかりの日野商人が移り住んであらたに日野町（現二荒町）が成立しました。つまり、記念すべき近世都市宇都宮の第一歩は、秀行によつて標されたこととなります。

秀行の没後、蒲生氏は伊予松山（愛媛県松山市）二四万石に転封となり、松山にも日野町（現緑町）を興しました。残念なことに、かつての蒲生氏の城下町である会津若松、宇都宮、松山に日野町の町名は現存していません。そのかわり、宇都宮には「日野町通り」の通称をもつ道路やバス停留所が残り、蒲生時代の面影を今にとどめています。

2 近世初頭の 宇都宮城下



●宇都宮氏 中世以前

中世の宇都宮は、慶長二年（一五九七）に宇都宮国綱が改易となるまで、宇都宮氏の本拠地でした。宇都宮城は、平将門を倒した藤原秀郷が天慶三年（九四〇）に築いたとも、宇都宮氏の祖と考えられている宗円が康平年間（一〇五八―六五）に築いたともいわれていますが、同時代の資料もなく、確証はありません。『吾妻鏡』等の資料には、宇都宮を本拠とした宇都宮氏については三代朝綱以降、その動向が確認できません。鎌倉時代中期、正元元年（三二五九）頃に成立した宇都宮氏を中心とした私選和歌集「新和歌集」の中で、「館にて百五十番 歌合し侍けるに 藤原景綱」との記載があります。藤原景綱とは七代景綱のことで、当時、宇都宮にあった宇都宮氏の「館」で歌会が催されていたことがうかがえます。宇都宮城の発掘成果から、も十三世紀中頃まで宇都宮氏の館の存在は遡ることができると考えられています。

南北朝時代から室町時代にかけて、多くの資料に「宇都宮城」の名称が散見されるようになります。戦乱が続く中で宇

栃木県立博物館 飯塚 真史

都宮氏の「館」は、徐々に深い堀や高い土塁を伴った防備の堅い「城郭」へと発展していったものと考えられます。また、中世の宇都宮の町は、宇都宮大明神（宇都宮二荒山神社）の南側に広がる門前町であつたと考えられ、南に位置する宇都宮城との間に町場があつたと推測されます。田川沿いを北上する奥大道沿い（宇都宮城の東部）に宿郷が発達し、中河原・上河原・博労町などに町場が存在していたと考えられています。

●蒲生秀行 日野町の成立

宇都宮国綱が改易された後、豊臣秀吉の姻戚にあたる浅野長政が宇都宮城代をしばらくの間つとめ、慶長三年（一五九八）には、蒲生秀行があらたな宇都宮城主として会津から入封します。（以下、江戸時代初期の宇都宮について同時代に書かれた資料はないため、江戸時代後期に書かれた歴史書『宇都宮志料』に依拠します。）秀行はまず堀を掘り直し、南西部の不動口、西部の歌橋口・佐野口・西原口などを

開き、出入口に陣を固めたとされています。さらに、成高寺・慈心院・粉河寺・東勝寺などを移転・廃寺させています。これは、寺院を城の外郭等に移転することで宇都宮の防禦体制を強化したものと考えられます。また、宇都宮氏時代の最有力寺院の一つであつた東勝寺はこの時に廃され、蒲生氏発祥の地近江から日野商人を招き、城に近接した東勝寺跡地のすぐそばに住まわせ日野町を開き、商業の振興に努めました。東勝寺跡に新たに日野町が形成されたことは、近世宇都宮城下町建設の第一歩といえます。

●奥平家昌 伝馬役の賦課

徳川家康が関ヶ原の戦いに勝利した後、蒲生秀行は会津に再封され、家康の孫にあたる奥平家昌が宇都宮に入封し、宇都宮は十萬石の譜代大名の城下町となります。慶長七年（一六〇二）には、家康が宇都宮町に家屋敷の年貢である地子の免除特権を与え、代わりに幕府の伝馬役を課しています。伝馬役は公用で使われる伝馬や人足を提供する労役で、原則として二宿ごとに継ぎ送り、つまりリレー方式で人馬を提供しなければなりません。このことは、江戸から奥州へとつづく近世の日光道中・奥州道中の拠点である宇都宮宿の整備のきっかけとなりました。『宇都宮志料』によると、慶長十九年（一六一四）、家昌は城の北東部の大町で五十日の六斎市を開かせたほか、城の西部の引路町から

茂破町間や蓬萊町・大黒町・熱木町・歌橋町などでも、定期市を開かせています。

●本多正純 日光道中を整備

元和五年（一六一九）、奥平氏に代わつて宇都宮に入封したのは、家康の側近として権勢を誇つた本多正純でした。十五万石に加増され、譜代大名としては、破格の待遇であつたと言えます。元和三年（一六二七）以降、將軍家の日光社参も行われるようになり、宇都宮城主になった正純には、宇都宮の街道と宿泊施設の整備が重要な任務として加わつていたと考えられます。そうした中で正純による宇都宮城と城下の大改造が断行されていくことになります。

まず、大手門を江野町口に移し、城北に三日月堀を造りました。それに伴い、街道を北に移しました。次に下河原・中河原・今小路門を建てて、奥州道中を塞ぎました。そうして、不動口から城の東側の下河原・中河原を通るルートから城の西側に新町（熱木町・歌橋町・大黒町・蓬萊町・茂破町・引路町・新石町・伝馬町）を開き、これらの町を通る迂回ルートに改め、日光道中と奥州道中の分岐点の伝馬町に元石町から問屋場が移設されました。具体的には、伝馬町で日光道中と奥州道中が分岐し、日光道中は本郷町・新田町を北上して日光方面に向かい、奥州道中は池上町・杉原町を通り、鉄砲町の辺りで南に折れ、城の外郭沿いに曲師町・日野町そして石町を通り、北へ向かい上河原町を経て奥州方面へと向かいました。また、

見られます。さらに町人居住地の外側にも足軽など下級武士の組屋敷が見られますが、規則正しく並んでいるのがわかります。これらの点については、他の宇都宮城下絵図にも見られる特徴で、本図が描かれた段階で既にこのような構造ができあがっていたことがわかります。

城外の侍町は、城の東北部の外堀に近接する地域（元石町）、城の大手口付近、宇都宮明神・粉河寺の北部付近、小幡町の西北部に位置しています。この中で注目される地点が二カ所あります。一カ所は、元石町と大手口付近、小幡町です。この地域は、侍町と町人居住地が混在している地域でした。後世の絵図を見ると、元石町は町人居住地に、大手口付近は元禄時代に広小路に、西北部の小幡町は域外の侍町へと変わっていきます。もう一カ所は、粉河寺です。土塁に囲まれた境内に武家屋敷七軒が配置されていることが見て取れます。中世以前の僧兵のような印象を受けますが、奥平家中の武士で、寺院の門前に存在した僧坊をそのまま転用した可能性があります。この周辺の侍町は、近世中後期以降は消滅し、農地となっています。

近世宇都宮城下の成立

絵図や後世に書かれた資料によれば、近世初期の宇都宮城は、中世に比べて城郭が拡大しました。その過程で三日月堀をはじめいくつかの堀を新造し、土塁を築きました。そして城下では、城の東部を通っていた奥州道中を城の西側に移動し、街

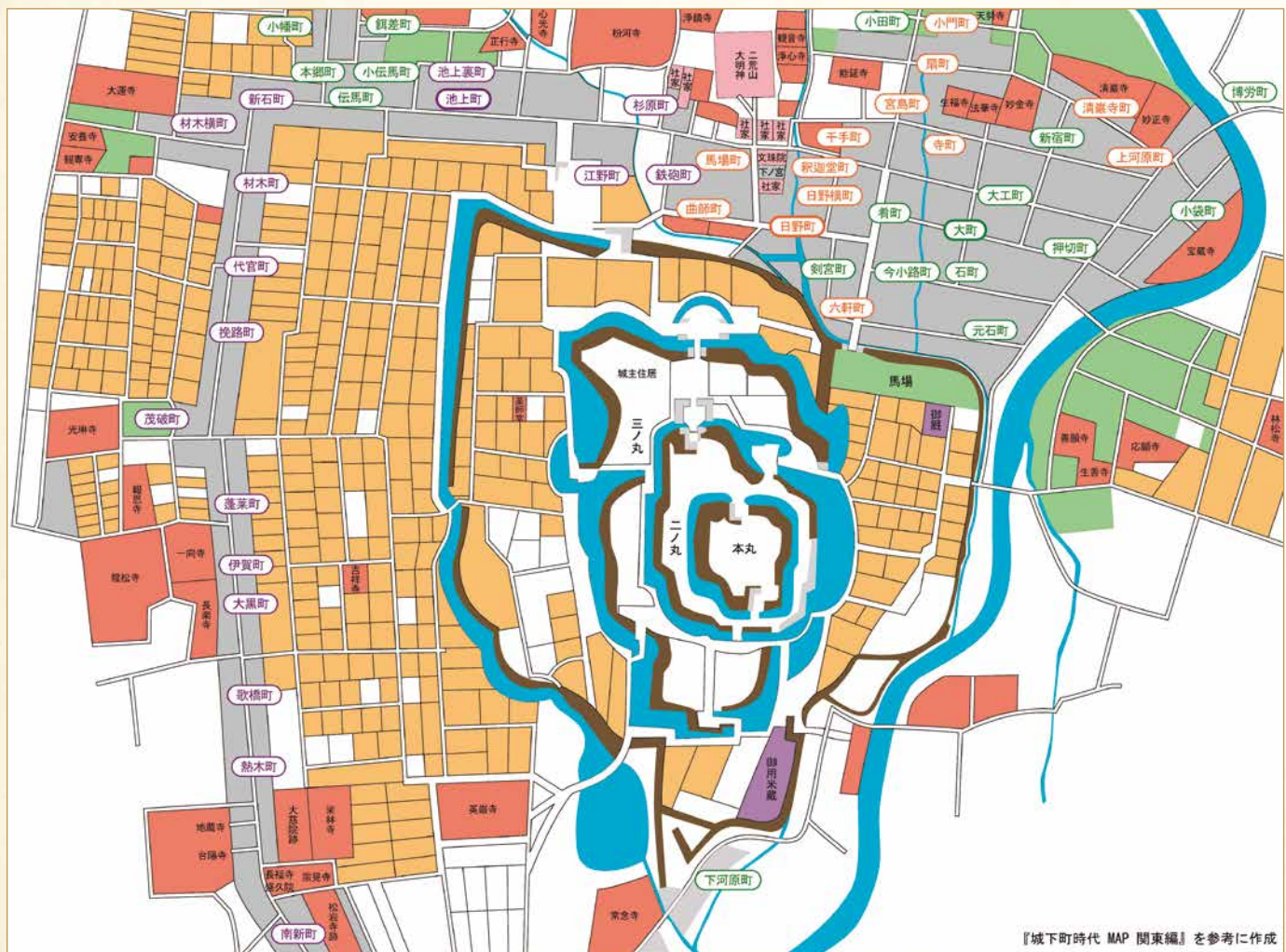
道沿いに新たな町を開きました。近世初期には中世の宇都宮を支配していた宇都宮氏ゆかりの寺社、宇都宮・荒山神社や粉河寺周辺に社家の居住地や僧坊等、そして防備のための土塁が残っていました。さらに、武家屋敷と町人居住地の混在するなど、町割の課題がありました。



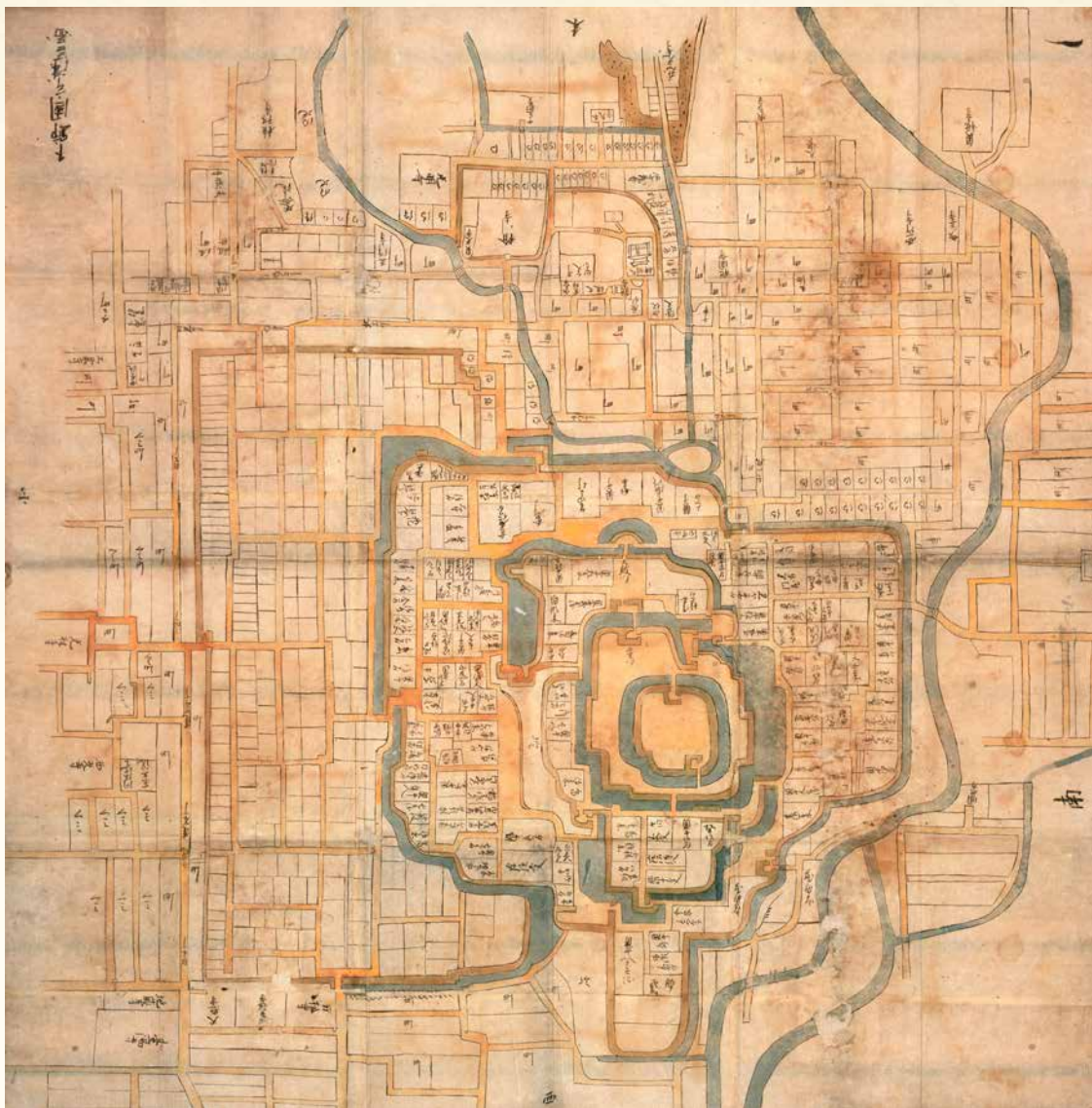
下野国宇津宮図〈拡大〉 宇都宮明神と粉河寺周辺

宇都宮の改造は一朝一夕でできるものではなく、近世中後期に向けて徐々に形ができていったと言え、その基礎が近世初期にあったと言えるのではないのでしょうか。

宇都宮地図 江戸時代と現代



〔 池上町組 日野町組 大町組 〕 町組(太枠は組長)
寺地 馬場・田畑・空地 土塁・石垣 水系 社地 武家屋敷地 藩関連地 町屋・町 道路



下野国宇津宮図 慶安年間(1648~52) 栃木県立博物館蔵

街道の分岐点に当たる伝馬町・池上町付近に旅籠屋が集中するようになり、宇都宮の宿駅機能がこの地域に集まりました。一方、穀物の商売は、石町が一手に引き受けていましたが、日光道中開通に伴い、伝馬町に隣接する新石町でも携わるようになりました。こうして、城北東部の上河原町・大町・石町等の古くからの町場と合わせて城西側に町が開かれ、主要な道筋となったことで宇都宮の宿駅としての機能や商業的機能は飛躍的に拡大していきました。このように宇都宮城下の整備は、中世からの古い町場に集中していた機能を新たに造った町に分散させることで宇都宮宿全体の均質な発展を企図していたものと考えられます。

城下の大改造を行ったとされる正純でしたが、在封三年で元和八年(一六三二)に突然改易となっていました。わずか三年間で正純にこれだけの都市の大改造ができたかについては検討の余地があります。いずれにしても城下の整備

絵図に見る城下の変遷

先にも述べましたが、宇都宮城・城下に関する近世初期以前の文献資料は現在確認できていないため、発掘の成果と江戸時代中期以降の資料に依っています。その中で現在確認できる最古の資料が「下野国宇津宮図」(栃木県立博物館蔵)で、成立年代は慶安年間(一六四八~五二)で奥平忠昌が城主時代の絵図と推測されています。全体的に空白の部分が見受けられ、未完成の絵図とも考えられます。三の丸の西方の堀の南半分のみ「堤」と記され、他の堀のように、水色の着色もないことから、この時点では堀がなかったと考えられます。また、城の南西部のみ外堀が「堤」と表記され、堀が城を取り囲めておらず、城下が完成途上の姿が見取れます。後世の宇都宮城下絵図との比較も踏まえて、以下では、城下絵図から宇都宮城城下の変遷過程について考えていきたいと思います。

まず城域部には、城門・櫓・堀・土塁が描かれ、城内に上級武家の屋敷が描かれています。これは、後世の宇都宮城下絵図とも共通しており、十七世紀後半以降、城郭の改変がほとんど行われなかったことを示しています。

城下の西側の街道は数カ所で鉤の手に折れ、城の外郭と町人の居住地との間に位置する広大な侍町(武家屋敷)には江戸時代の城下町に特徴的なくい違いが随所に

は途上であり、後に続く宇都宮城主に引き継がれていくことになります。